

『三銃士』の面白さは？

主人公たちの血沸き肉踊る冒険 少年時代の夢を胸に“花の都”を訪ねる

とにかく面白い小説だった。決して文学少年でもない自分が本を読むようになったきっかけを作ってくれた作品だった。それは中学 2 年の秋、読書週間が始まるのを前に担任の先生が「何でもよいから本を読みなさい」と指導されたことから始まった。そして学校の図書館でたまたま手にした本が少年版『三銃士』だったのだ。

読み始めると止まるところがなかった。日本式に言えばチャンバラ小説である。主人公ダルタニアンと三銃士たちの胸のすくような活躍。たくらみを抱く枢機卿から王妃を守ろうとする 4 人の“血沸き肉踊る”冒険ぶりがたまらなかった。

全部を合わせても 500 冊には満たない蔵書の小さな図書室。読書テーブルには秋の夕陽がそそぎ下校をせまられた。そこで本を図書室から借りて帰り、自宅で深夜まで読み耽ったような気がする。

あらすじは次のようだった。

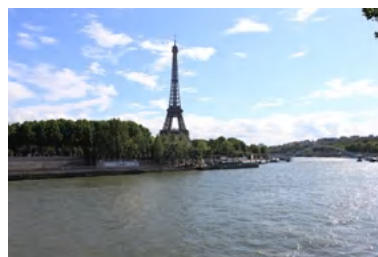


ガスコーニュ出身の田舎貴族ダルタニアンは、銃士になることを夢見てパリに出てくる。ところがパリへの道中で謎の騎士に紹介状を盗まれてしまう。挙句、成り行きで銃士隊でも名を馳せる三人衆アトス・ポルトス・アラミスと決闘をする羽目になる。

ダルタニアンは意を決して決闘に赴いたが、アトスとの決闘を始めた途端に枢機卿リシュリーの護衛士が現れる。決闘は中断となり、三銃士と護衛士の戦いとなる。ダルタニアンは三銃士の仲間として護衛士と戦う事を選び、枢機卿派きっての剣客ジュサクを下して三銃士側を勝利させる。この事件でダルタニアンは三銃士の仲間入りを果たした上に、トレヴィルや国王からも一目置かれる存在となる。

ある日、ダルタニアンは家主ボナシューの依頼で彼の妻である王妃の下着係コンスタンスを探す事になる。彼はコンスタンスに恋をし、そこから枢機卿リシュリーの陰謀に陥れられる寸前の王妃の危機を知る。強引にコンスタンスの依頼を受けたダルタニアンはバッキンガム公爵からダイヤの飾り紐を返してもらうため、三銃士とともにイギリスを目指す。イギリスでは謎の貴婦人ミレディーが暗躍していた。

最初に小説に触れてから半世紀以上もたった今年（2012 年）の夏、ユゴーの『レ・ミゼラブル』の取材と併せて作品の舞台パリを訪れることになった。そんな矢先、地元（昭島市）の映画館では「三銃士」が 4 月に上映された。現代風にアレンジされた 3 D 映画で、カラーフルの活劇で面白



セーヌ川とにエッフェル塔

かった。でも原作からかなり飛躍した部分があるようにも思われた。本当に楽しむためには、やはり原作にはしかず。私はパリの舞台を訪れる前にいくつかの翻訳本に目を通して見た。

『三銃士』のファンは意外と多い。その何人かはネットで作品の舞台を写真入りで紹介している。パリを左岸と右岸に分け、ダルタニアンさらにアトス、ポルトス、アラミスの三銃士が住んでいたという下宿まで地図で示している。

私は物語の中で王と王妃、それに枢機卿が駆け引きを繰り広げた主舞台となったルーブル宮殿、それに作者アレクサンドル・デュマと三銃士およびダルタニアンが一つにまとめられた彫像の立つリュクサンブール公園を訪れた。



セーヌ川河畔の広大な敷地に広がるルーブル宮殿のほとんどすべての建物には、その最上部にいたるまで芸術的な彫刻が残されていた。さすがである。今はルーブル美術館となり展示作品の多さと質を含めて世界の三大美術館の一つに数えられるようになり、デュマが描いた当時の模様とはかなり変容している。

芸術的なルーブル宮殿 いくつかの翻訳書や解説書をひもといている中に私にぴたりのものがあつた。角川文庫の竹村猛訳『三銃士』の解説に「東京のドン・キホーテ」を自任する私には格別の共鳴を覚えたのである。

p8 一人の青年、今その肖像をひと筆で描くとしようか。まず、18歳のドン・キホーテをご想像願いたい。鎖かたびらも胸当てもつけていないドン・キホーテ。青い地色が、酒糟色か明るい空色か見分けもつかない色合いに変わってしまった、毛織の胴着をまとっているドン・キホーテである。顔は面長で浅黒く・・・



p9 父親からもらった馬の悪評・・・この悪評は若いダルタニアンに **凛々しいダルタニアン** にとって——この今様ロシナンテに乗ったドン・キホーテの名はこういった——自分がいかに名騎手であっても、こんな馬にまたがればこっけいな姿にならざるを得ないことは百も承知ただけに、いっそうその身にこたえた。だからこそ彼は、父ダルタニアンからこの馬を餞別として拝領におよんだときには、深いため息をついたものだった。

p12 このような携帯品を持ったダルタニアンは、さきに作者が歴史家の義務としてその肖像を描いて比較をしておいたかのセルヴァンテス作中人物に、姿ばかりかその心までが生き写しであった。ドン・キホーテは、風車を巨人と見まちがえ、羊群を軍勢と思い違えたが、わがダルタニアンは、ひとの微笑をすべて侮辱と見まちがえ、人の視線をすべて挑戦と思いちがえた。



デュマ（上）と三銃士

たぐいまれな性格のヒーローが敵の陰謀をかいくぐり、縦横無尽の活躍をする。面白くてそこから文学少年でもない自分が本を読むようになった。さらにそれは、定年後の「世界文学紀行」へとつながっていった。紀行の第一作目がなんとセルバンテス作の『ドン・キホーテ』、そして第 15 作目がこの『三銃士』となったのだ。奇妙な因縁のような気がする。面白い一書は読者にどれほどの夢を広げていくことか！その典型の一つが『三銃士』だったのである。